

コロナ禍における信用金庫の金利リスク (ΔE V E) の変化について

Short Review
2021年3月

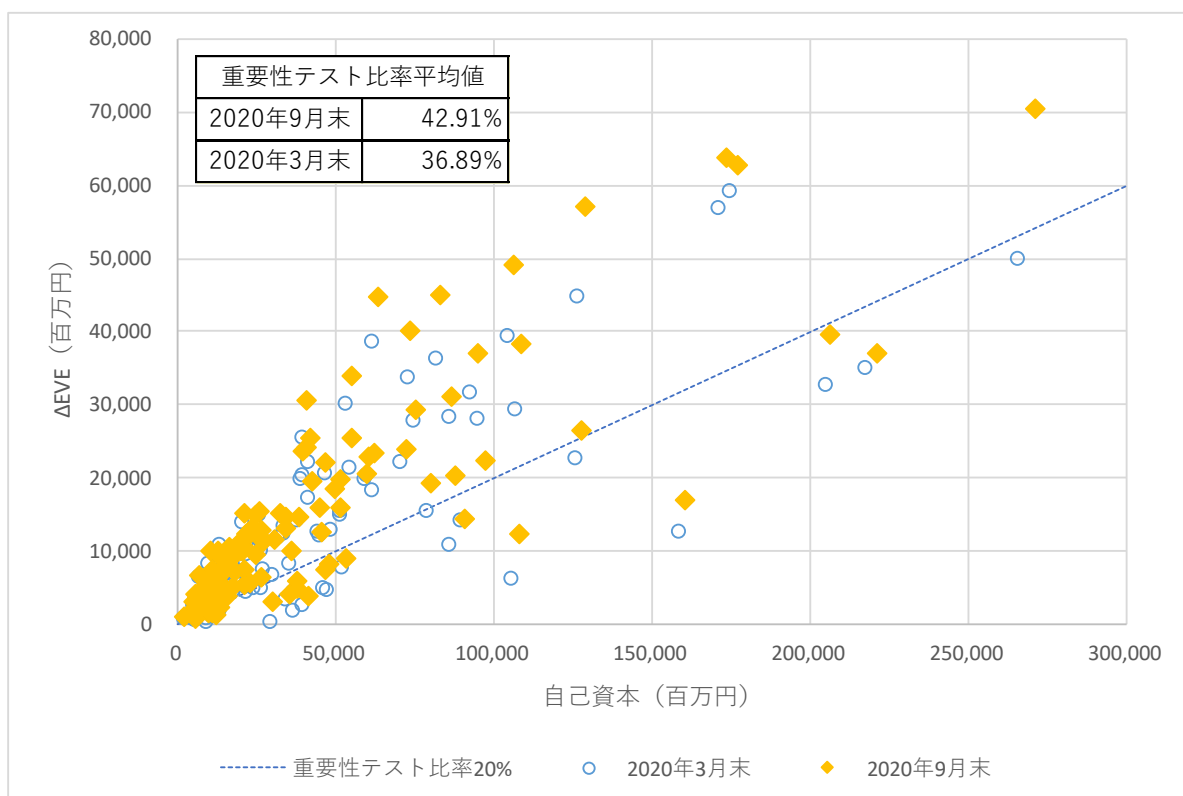
資産運用研究所
山本直紀

1. はじめに

信用金庫においても 2019 年 3 月期より IRRBB（銀行勘定の金利リスク）計測基準の一つである ΔE VE（経済価値変化）の開示が始まった。本稿ではコロナ禍における信用金庫の金利リスクへの対応状況を把握するため、2020 年 3 月と 2020 年 9 月の ΔE VE および重要性テスト比率の比較を行った。

2. 信用金庫の金利リスク (ΔE VE) の開示状況

図表 1 信用金庫の ΔE VE と自己資本の分布（対象 139 行）

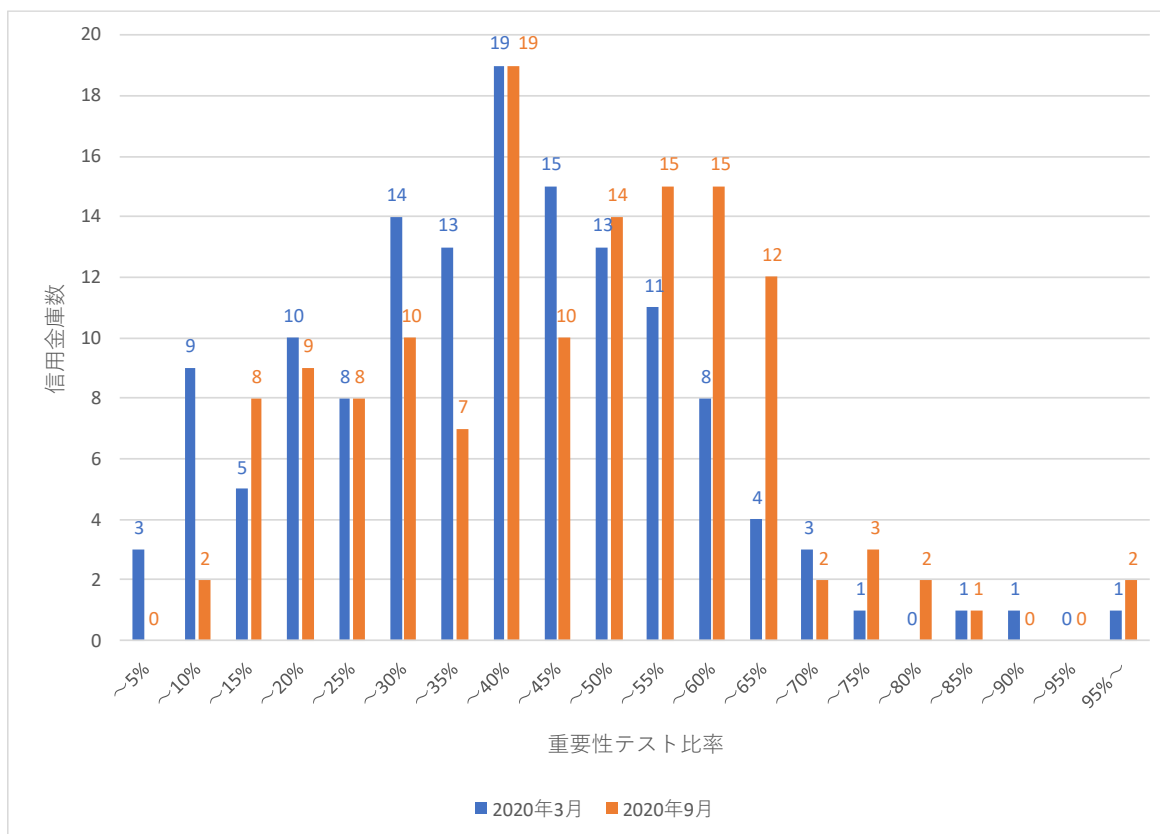


(出所) QFINDR F+より日興リサーチセンター作成

図表 1 は 2020 年 9 月末の ΔE VE を開示している信用金庫（254 行中 139 行）の ΔE VE と自己資本の散布図である。自己資本に対する ΔE VE の比率は重要性テスト比率と呼ばれ、20%を超えると金融庁

の監督対象となる可能性がある。2020年9月末時点でのΔEVEは2020年3月末に比べ増加傾向にあり、重要性テスト比率の平均値は2020年3月末の36.89%から42.91%と約6%上昇している。

図表 2 信用金庫の重要性テスト比率分布（対象 139 行）



(出所) QFINDR F+より日興リサーチセンター作成

重要性テスト比率の分布を5%刻みのヒストグラム（図表 2 参照）で確認してみると、上昇傾向がより顕著になる。重要性テスト比率が20%を下回っている信用金庫は2020年3月末では対象139行中27行であったが9月末は19行と減少している。また、2020年3月末では35%~40%が最も行数が多く、その左右にほぼ均等に分布していたが、2020年9月末では最頻値帯こそ変わらないものの50%~65%帯が大幅に増加している。

次に、信用金庫の本店所在地別に「北海道」「東北」「関東」「東京」「甲信越」「北陸」「東海」「近畿」「中国」「四国」「九州・沖縄」の11の地域に分類して重要性テスト比率の集計を行った（図表 3 参照）。重要性テスト比率の平均値が最も低い地域は「東京」、最も高い地域は「甲信越」となっている。特に「甲信越」「北陸」は最小値でも重要性テスト比率が20%を超えていることから、地域内の一部の信用金庫が平均値を押し上げているのではなく全体的に重要性テスト比率が高い地域といえる。

図表 3 地域別重要性テスト比率（対象 139 行）

	対象行	2020年9月末			2020年3月末		
		平均	最大	最小	平均	最大	最小
北海道	10	35.25%	55.62%	14.50%	28.48%	51.87%	8.02%
東北	17	51.31%	104.64%	17.91%	43.40%	100.13%	14.25%
関東	15	42.59%	59.65%	10.59%	35.44%	59.02%	7.90%
東京	8	20.62%	33.66%	11.37%	15.66%	29.34%	4.93%
甲信越	9	54.94%	82.05%	34.67%	48.15%	74.15%	33.60%
北陸	9	52.56%	73.38%	36.31%	47.56%	68.24%	29.72%
東海	26	45.54%	71.27%	15.73%	40.06%	82.25%	2.90%
近畿	16	33.85%	75.82%	9.61%	28.84%	64.60%	6.54%
中国	12	50.09%	99.72%	9.89%	43.43%	88.44%	0.93%
四国	7	36.19%	58.87%	16.83%	33.05%	49.80%	16.14%
九州・沖縄	10	38.83%	65.64%	10.53%	33.18%	64.17%	9.24%
対象行全体	139	42.91%	104.64%	9.61%	36.69%	100.13%	0.93%

(出所) QFINDR F+より日興リサーチセンター作成

図表 4 ΔEVE 最大シナリオ（対象 139 行）

	2020年9月末	2020年3月末
上方パラレルシフト	130	123
スティープ化	7	14
下方パラレルシフト	1	2

(出所) 各行ディスクロージャー誌より日興リサーチセンター作成

ΔEVE が最大となるシナリオを集計すると、上方パラレルシフトが増加し、スティープ化、下方パラレルシフトは減少している。（図表 4 参照）

また、同じ地域金融機関である地方銀行の状況（藤江[2020]）と比較すると、地方銀行ではΔEVE 最大値シナリオが上方パラレルシフトと下方パラレルシフトでほぼ半々となっていたが、信用金庫では上方パラレルシフトに大きく偏っている。

通常、上方パラレルシフト時（＝金利上昇時）には貸出や有価証券などの余資運用の経済価値は下落する。信用金庫では負債サイド（預金）の金利リスクに比べ、資産サイド（貸出、有価証券などの余資運用）の金利リスクが上回っているところが多いために上方パラレルシフト時にΔEVE の最大値をとることが多いと考えられる。

3. 信用金庫の銀行勘定の推移

ΔEVE 算出の対象となる銀行勘定について、預金、貸出、余資運用（預け金、有価証券）といった科目ごとの推移をみる。（図表 5 参照）

図表 5 信用金庫の銀行勘定（預金・貸出・余資運用）の推移

単位：兆円	預金	貸出	余資運用	うち	
				預け金	有価証券
2015年9月	134.7	66.5	76.7	33.2	41.5
2016年3月	134.7	67.3	77.9	32.8	43.2
2016年9月	137.7	68.2	78.7	35.2	41.7
2017年3月	137.9	69.2	79.5	35.0	42.6
2017年9月	141.1	70.2	80.7	37.4	41.5
2018年3月	141.0	71.0	81.0	36.5	42.6
2018年9月	143.8	71.5	82.8	38.2	42.7
2019年3月	143.5	72.0	82.9	37.7	43.3
2019年9月	145.6	72.0	83.8	39.7	42.1
2020年3月	145.3	72.7	83.1	38.0	43.1
2020年9月	155.6	77.3	92.3	45.5	44.5

（出所）信金中金 地域・中小企業研究所公表データより日興リサーチセンター作成

この5年ほどは預金、貸出、余資運用とも緩やかに増加し続けていたが、2020年3月以降急激に預金が増加していることがわかる。コロナ禍対応政策の影響によるものと思われる。それを受け、貸出、余資運用とも急拡大しており、その結果、多くの信用金庫で、金利上昇シナリオ（上方パラレルシフト）時における資産サイドの経済価値の減少額が拡大（ΔEVEが増加）し、2020年9月末の重要性テスト比率の値を大きく押し上げたと考えられる。

4. 最後に

本稿では2020年度中間期のディスクロージャー資料を基に、コロナ禍における信用金庫のIRRBB対応状況を確認するため、ΔEVEの最大値、重要性テスト比率、それらに影響を与える数値として銀行勘定の内訳の推移を集計した。その結果、信用金庫の2020年9月末の重要性テスト比率が大きく上昇していることが確認できた。また、コロナ禍を背景にした政策の影響で、信用金庫においても大量に預金が増加していることが分かった。今回の中間期データでは開示項目が限られ精緻な分析は行えないが、2021年3月期のディスクロージャー資料ではより細かな情報が開示される。負債サイドでは流動性預金におけるコア預金の年限、資産サイドでは貸出・有価証券の年限などのデータを基に改めて信用金庫のIRRBB対応状況に関して詳細な分析を行いたい。

参考文献

藤江[2020], 「【Short Review】地方銀行の金利リスク（IRRBB）開示状況調査（2020年）」
<https://www.nikko-research.co.jp/library/9270/>

(END)